『比較民俗研究』6．1992／9

“竜の眼”－資料と短信－

対馬の鳥霊信仰

萩原秀三郎※

今年5月，佐賀で“倭と越”についてのシンポジュウムがあったついでに，対馬に立ち寄ることとした。かねてより，鳥と霊魂の関係に興味を抱いており，対馬には死霊を運ぶ鳥の習俗があると聞いていたからである。

立原進氏や永留久恵氏のご報告を事前に読んで，まず厳原町曲（いづはらまがり）の区長さん宅に電話をしてみたところ「ここ数年はなかったが，二日ほど前葬式があり，珍しく土葬で，現在，安楽堂の上にツバメが立っている。明日にでも来られますか」という。市川市の自宅から電話した私はすぐにでも飛び立ちたい気になったほどだった。

死霊を蛇（竜）が運ぶ例は多い。利根川流域の利根町とか小川町では，初盆の家に盆綱（蛇ワラ）を子供たちがかつぎ込み，蛇に死霊を乗せて墓地までの送り迎えをしている。葬列に龍頭を加える事例となると，全国に及んでいる。中国地方の荒神神楽や大元神楽では蛇ワラをくり出して，蛇霊にことよせ新霊を祖霊の世界の仲入りさせる儀式をあちこちで行っている。

しかし，鳥霊が死霊を運ぶ例は，そう多くは知られない。立平氏は，鳥原半島や大分県海岸部，宇和島でそんな例を聞いたというが，私も鳥取県とか鹿児島県長島の例を伝え聞いたに過ぎない。古代の天鳥舟とか，記紀に鳥霊にまつわる記載の多様さから，当然現行の民俗にももっと多くの事例が知られてよいはずである。穀霊を運ぶ鳥の話ならいくらも採集できるのではないかと思うが，死霊を運ぶ鳥についての報告は少ないようだ。

考古学上の所見では，龍の絵は弥生中期以後だが，鳥霊信仰を思わせる鳥形木彫は弥生前期（縄文晩期とする説も）から出土する。

※民俗写真家（アジア民俗学）

シンポジュウムでご一緒だった佐野賢治氏と別れて，5月19日，周星氏をともない福岡空港から対馬に降り立ち，直ちに曲へ向かった。空港では，永留氏がわざわざお出迎え下さった。曲は空港から10キロ余り厳原町に寄った漁村で海女で全国的に知られる。曲の区長さんのご案内で，集落の東の山手にある墓地の最奥に新しい土葬の墓があった。真っ赤なノボリが立ち，真新しい安楽堂（須屋（スヤ）とも霊屋とも呼ばれる）が土葬の上にすえられ棟の上に棒を立て頂にツバメが止まっていた。

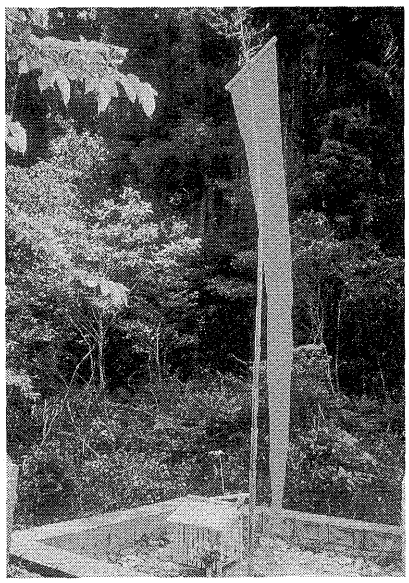
葬列は赤いハタが先導し，つぎに須屋持ち，そして立棺がつづき，立棺はテンギェ（天蓋）と呼ぶまといのような房飾りのついた円い蓋状のもので覆われた。ハタは以前は赤，黄，緑，藍（あい）など数多く縁者から出されたが，現在は赤一本で代表される。また，テンギェをつくる人がいなくなり，土葬もみられなくなった。須屋の扉には昔は水蓮などの花を画いたが，近頃は酒の好きだった人は酒盃とか，アワビ採りの海女であればアワビとか，花の好きな人は花であるとか，それぞれ亡くなった方の好物なり生活をしのぶものを画くようになった。須屋の中には位牌，菅笠，下駄などを入れる。葬列に須屋持ちは加わらず，須屋だけは先に墓所に置くこともあった。以上は区長の梅野義雄氏のお話である。

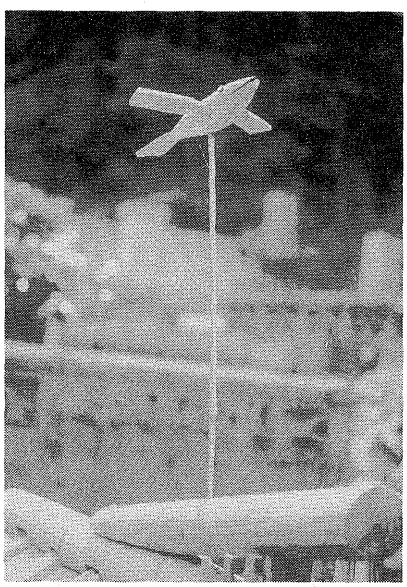
土葬後，7年から多くの場合13年経つと骨を火であぶり洗骨し骨壷に入れて石塔を建てる。現在はすでに先祖代々の石塔が建つ墓地の一角に須屋をすえる形となっているが，須屋自体2～3を数えるにすぎなくなっている。どの須屋にも必ずツバメと称する鳥形の木竿が立っている。材質はすべてをスギでつくられたものと，胴だけスギで，手羽，尾は紙でつくったものとあった。紙製の尾は二又に分かれてツバメの尾らしくなっていた。寸法は，全長10センチ前後のものである。なぜ鳥はツバメなのかといえば，ツバメは早く魂をあの世へ運んでくれるからだという。

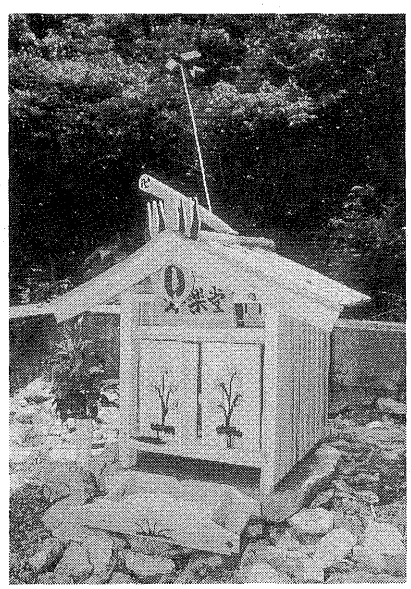
翌日，以前はこの習俗があったとされる椎根，樫根，経塚の各集落をめぐったが，経塚にだけ，数年前につくられた須屋が鳥竿ともども雨ざらし

でくずれかかって見つかったにすぎない。

葬制に鳥がかかわることは，中国黔南ミャオ族や広西の白褲ヤオ族にも見られるが詳細はまだわからない。ミャオ族にとってツバメは子授けの霊鳥でもある。朝鮮半島のソッテ（蘇塗）の鳥竿とも近似した習俗であり，今後究めるべき重要なテーマであろう。







対馬厳原町の安楽堂

左上　土葬されたばかりの墓地には新しい安楽堂と赤いハタが一本たてられていた。

左下　安楽堂にとりつけられたツバメ

右下　設置され数ヵ月たっている安楽堂